University Academic Repository

近代化過程における「中体西用」と「和魂洋才」
思想の比較

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-11-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 曾, 丹, 馮, 雪梅, 巖, 清華 メールアドレス: 所属:
URL	https://kaetsu.repo.nii.ac.jp/records/352

研究ノート

近代化過程における「中体西用」と「和魂洋才」 思想の比較

Comparison between the "Westernization of Chinese Style" and "Japanese Spirit within Western Learning" in the Process of Modernization

曾 丹 馮 雪 梅 嚴 清 華
Dan ZENG Xuemei FENG Qinghua YAN

<要約>

東アジアの近代化にとって、西洋文明の導入が大きな役割を果たしたことはよく知られているが、中国と日本は近代化の初頭、西洋文明の圧倒的軍事力の下で、富国強兵のために、西洋に対抗する手段として、内容的に極めて似通ったスローガン「中体西用」と「和魂洋才」を提唱したにもかかわらず、その結果から見れば、日本は東アジアの諸国に先駆けて近代化を遂げたのにひきかえ、中国の近代化は著しく遅れていた。そこで、その深層にある原因について改めて検討し直す必要が生じていると思われる。

本稿では、まず「中体西用」と「和魂洋才」思想形成の原因分析の上に、その思想形成の過程と発展軌跡を浮き彫りにした。そして「中体西用」と「和魂洋才」思想の生まれた背景、具体的な内容、本質など幾つかの面から、両思想を比較しながら、両者の共通点と相違点について検討を行った上、近代化の過程において「中体西用」と「和魂洋才」の実際に果たされた効果の差異が生じた原因を探求してみた。

<キーワード>

近代化、中体西用、和魂洋才、比較、思想

1 はじめに

中国近代化の初頭、洋務運動の指導者たちが、「富国強兵」さらに西洋列強の侵略に対抗するために、有名な「中体西用」、すなわち「中学を体となし、西学を用となす」を唱え、中国の近代史に大きな影響を与えた。一方、日本も、明治維新前後すなわち日本の近代化の初頭、積極的に「文明開化」政策を進め、西洋の自然科学を摂取し、「富国強兵」を図るた

めに、「和魂洋才」という影響力のあったスローガンを掲げた。

「中体西用」と「和魂洋才」という二つのスローガンは、中日両国の伝統思想と固有文化が近代西洋文化に接触した際、生み出されたものである。「和魂洋才」論によって明治近代国家が形成されたのに対して、「中体西用」論は、中国の民族危機を救うことはできなかった。その原因はどこにあるのであろうか。その原因については様々な説があるが、本稿では従来の先行研究を踏まえてその原因を探ってみたい。

これまでの「中体西用」と「和魂洋才」についての研究は、主なものとして、「中体西用」の思想内容の検討とそれを評価するもの（劉学照（1986）、李華興（1986）、高坂史朗（1993）等）、「和魂洋才」をめぐる歴史的変遷や近代に突入した日本人の戸惑いと超克を論じるもの（平川祐弘（1987）、高坂史朗（1992）等）や「中体西用」と「和魂洋才」を比較する研究（伊原沢周（1999）、中島嶺雄（2008）、武安隆（1995）、余芳梅（2008））などがある。ここでは、まず比較という視点から先行研究の整理を試みる。

伊原沢周（1999）の主張する「中体」と「和魂」とのつながりは、儒教の論理道徳がそのもとにあると思われるが、他の角度から見ると、「和魂」の内容は、儒教の論理道徳のほか、仏教思想や神道精神をも含んでいるのに対して、「中体」の内容は、儒教の論理・思想のみで、仏教や道教などは除外されていると主張している。また、「洋才」の意味は、単に西洋科学技術のみを身に付ける人材を養成することではなく、西洋の思想文化教育、政治経済及び生活様式などのすべてをも吸収することであり、「西用」の意味は、ただ「西芸」「西政」のみを摂取し、しかも摂取されたものを中国の伝統文化に溶けこませることは、きわめて困難であり、西洋文化に対する日本と中国との受容・調和は、相当異なっていると言わざるを得ないとしている。

中島嶺雄（2008）の主張する「和魂洋才」の「才」には、「ヨーロッパの近代化の精神」が含まれるが、「中体西用」にはヨーロッパを機能的に受け入れる意味しかないと述べている。両者を比較してみればわかるように、中国の「中体西用」は西洋の進んだ科学技術を受け入れて、近代資本主義の論理と精神を全面的に受け入れるというものでは決してなかったのである。それにひきかえ、日本の「和魂洋才」は単にヨーロッパの科学技術を日本の伝統に付け加えて摂取し、近代化を図っていくという意味ばかりではなく、ヨーロッパの近代化の精神が含まれたわけで、全面的に受容したと指摘している。

武安隆（1995）は、「和魂洋才」と「中体西用」の出発点はほぼ同じであるが、しかし歴史の推移に従い、「和魂洋才」の取捨標準がますます寛容になっていくが、「中体西用」は大きな突破がなかった。また、「洋才」は西洋の技術だけではなく、一部の制度や思想も「洋才」と見なして受け入れる。それに反して、「中体西用」は西洋の文化を吸収する時、「西用」は一般的に西洋の科学技術に限定し、西洋の制度と思想は「中体」の対立するものと見なして排斥したと指摘している。

余芳梅（2008）は、中国の洋務運動の失敗と日本の明治維新の成功の歴然とした差がある

がゆえに「中体西用」と「和魂洋才」の比較研究の意義があると思われると指摘している。また、「中体西用」と「和魂洋才」思想は中日近代化の過程において生まれた社会思潮であり、始めの頃は発想が同じで、富国強兵であったが、時代の発展に伴って、実施の主体や社会環境等の差異により、両国の近代化がまったく違った結果になったとしている。

従来の研究において「中体西用」と「和魂洋才」思想の比較研究は上述のように、近代化の過程において両国に現れた効果の差異が生じた原因は論理道徳なのか、提唱者の根本的な目的の相違によるものなのか、西洋文化受容の幅によるものなのか様々な意見に分かれているが、これらの主張は、後の研究に重要な示唆を与えた。本研究もその例外ではない。しかし、比較の視点から「中体西用」と「和魂洋才」思想の起源からその変遷を系統的に考察し、両国の近代化の過程において全く異なった結果になった原因を客観的に論じるものはなかったのが現状である。そこで、本稿では、中島嶺雄、武安隆等の中国近代化の失敗の原因を「中華思想」そのものの自縛に帰していることに共感し、余芳梅の比較研究意義があるという見解を踏まえ、中日両国の近代化への対処の方法に注目し、より広く史的考証に基づき、両者の共通点と相違点を解明することによって、近代化を推し進める上で両思想の果たされた役割と効果の差異が生じた原因について考察を試みたい。

2 西洋文明の衝撃による「中体西用」と「和魂洋才」

「中体西用」と「和魂洋才」思想の形成は、両国の固有文明が西洋文明に触発されてなされたと考えられる。中国は世界の文明古国として、西洋文明が勃興する前に、中国の伝統文明はすでに独立し、独自の体系があった。日本においては、西洋文明が導入される前に、中国古代文明に憧れ、特に隋唐律令制度を手本としていた。西学東漸後、特にアヘン戦争の後、西洋文明は大量に中国に流れ込み、また幕末開国後の日本にも大量に流れ込んだ。資本主義の機械化大量生産を物質的な基礎とする近代文明の代表である西洋文明は、自然経済の小生産を背景とする中国と日本の封建伝統文明より、もっと経済上の競争力があると認めざるを得ない。西洋文明の伝入は中国と日本の伝統文明に大きな衝撃を与え、人々に対して、現実を臨み、考え方を変え、西洋文明の薫陶を受け、西洋文明を学ばなければならないと主張するように強いた。

2.1 洋務思潮の形成及び「中体西用」の提起

洋務思潮は19世紀60、70年代に形成され、主な主張は洋務事業を興すことと、近代経済事業やその他の事業を進めることである。太平天国運動の勃発と二回のアヘン戦争の惨敗によるショックで、中国は内憂外患の状態にあり、朝野の志士たちが時勢の変化を見て、西洋の長所を学んで自国の短所を補って、富国強兵を図ることを主張した。李鴻章は「わが国は数千年に一度の局面に直面しているのだから、数千年にない奇功を立てるべきだ」¹⁾、「今日、喜んで洋務を論ずべき聖時である」²⁾、「中国が自分で強くなろうとしたら、むしろ外国の利

器を習うべきだ。外国の利器を習おうとしたら、むしろ利器を作る機械を捜すべきだ」³⁾と述べている。

しかしながら、人々は西学を学べばわが国の何千年にわたって積んできた「中学」が破壊されるのではないかと疑念を抱き、洋務思潮の反対者たちもそれを口実として洋務運動に反対した。そもそも、洋務思潮の代表者たちは清朝の皇室貴族、地方官僚及びその代理者であり、清朝の基本的な政治制度を擁護する立場に立っている。彼らにとっては、西洋に習い、西洋の科学技術を取り入れる目的は清朝の統治土台を固めることである。一部分の洋務思潮の代表者はそのような情勢と基本的な認識に応じて、「中体西用」を提起した。

2.2 日本の伝統的な西洋観の変化及び「和魂洋才」思想の提起

日本では、幕末開国の前には鎖国の状態にあった。中国古代の「夷狄」思想の影響で、通常西洋諸国を「夷狄」、「戎狄」、「蛮人」と呼び、邪教を信じ、人倫を知らない、開化されていない民族のような存在として蔑視されると同時に、日本列島を奪おうとする野心を持った恐るべき存在として敵視していた。そのような蔑視と敵視の見方は幕末開国前の日本人の西洋観を反映している。

江戸時代の中後期から、特に1853年アメリカの提督ペリー来航を契機として、日本の伝統的西洋観は急速に変化しはじめた。欧米の軍艦砲火の脅迫のもとで、西洋列強の侵略への抵抗、民族の独立と国家の富強のために、日本人は自己の欠陥を自覚し、西洋を理解し始め、当時の西洋文明が確かに東方文明より進んでいることを認め、西洋文明の導入を急激に推進するようになってきた。正視と重視は開国後の日本人西洋観の特徴といってもよかろう。開国前の軽視と敵視という伝統的な西洋観とは対照的である。そのような西洋観のもとで、日本の思想家たちは西洋文明の先進性を肯定し始め、西洋文明を導入することを主張していた。「和魂洋才」思想はそのような西洋観を前提として形成されたのである。

3 「中体西用」思想の形成及びその発展軌跡

3.1 「中体西用」思想の形成

馮桂芬は1861年に「校邠廬抗議」を著し、「中体西用」思想を最初に述べた。彼は「西学を採る議」篇で自強のために、西学を採って学校を設け、聡明な児童を呼び集め、西洋の言語や自然科学技術や生産技術などを学ばせると主張している。「もし、中国の倫常名教をもって根本とし、それを諸外国の富強の術によって補強すれば、いっそう善の善なるものではないだろうか」と彼は述べている。この「中国の倫常名教をもって根本とし、それを諸外国の富強の術によって補強」という論点は「中学は体であり、西学は用である」という思想の最初の表現である。

その後、数多くの洋務思想家と維新思想家もこの思想について論じた。左宗棠は「中国の知恵は虚であり、外国の聡明は実である。中国では、義理が本とされ、術が末とされる。外

国では、術が重視され、義理が軽視される。両者が各是其是であり、互いに不相逾である」⁴⁾と述べている。

李鴻章も「中国の文武制度は各面で西洋より優れているが、火器だけは遥かに及ばない」⁵⁾と述べている。また、「中国の文物制度は、外洋野蛮の風俗とは、はるかに異なっており、治平を致し、邦を保ち、帝業を不敗の基礎に固めるゆえんのもの、もともとはっきりと存在いたしておる。……経国の大略をかえりみるのに、そこには、全体にかかわるものあり、一端にかかわるものあり、また、本があり、末がある」⁶⁾とも述べている。

鄭観応は「中学は本であり、西学は末である。中学を主要にし、西学を補助的な地位におく。緩急を知り、変通を調べ、剛柔を操縦し、政体を完全に理解する。教育の効果はここにある」⁷⁾と述べている。

薛福成は「西洋人の器・数の学を取り入れ、わが堯舜、禹湯、文武、周公、孔子の道を守り、西洋人をして、あえて中華を蔑視することがないようにさせる」⁸⁾と述べている。

王韜は「国を治めることは本であり、西洋を学ぶことは末である」⁹⁾と述べている。

康有為は「中学は体であり、西学は用である。体がないと成り立たない、用がないとできなくなる。両者が互いに補完し、どちらも欠けぬ」、「中西の限界を消し、新旧の門をなくす。体用を並べて挙げて、多くの人々を通才に育成する」¹⁰⁾と述べている。

最初に明確に「中学を体となし、西学を用となす」と提唱したのは孫家鼐である。彼は1896年の上奏文で「中学を根本にし、西学を補助にし、中学を体となし、西学を用となす。中学の備わっていないものを西学で補完し、中学の伝わらなくなるものを西学で補充する。中学によって西学を含め、西学により中学を凌いではならない」¹¹⁾と述べている。

「中体西用」思想を系統的にまとめて論述したのは洋務派後期のリーダーの張之洞である。彼は1898年に『勸学篇』を著し、「いま、中国を強盛に導き、中学を保持しようと望むのなら、西学を学ばないわけにはいかない。しかしながら、先ず中学によって土台を固め、識見、志向を正しておかないならば、……その禍いは、西学に通じないことよりも一層はなほだし良いことになろう」と述べている。「もし、中国の士人であって、中国の学に通じないならば、それは、ちょうど自分の姓を知らない人間、轡のない馬、舵のない船のようなものである。そういう人間は、西学を学ぶことが深ければ深いほど、中国を憎悪することもいよいよ甚だしくなる。博識多才の士であったとしても、これでは、国家も、どうして用いることができようか」¹²⁾と指摘している。

3.2 「中体西用」思想の発展

中国において、「中体西用」の発展は二つの段階に分けてもよからう。19世紀60年代から1884年の中仏戦争までが第一の段階である。この段階においては、洋務思想家たちは保守的で頑迷的な封建思想家を主な論敵としている。解決する課題は西洋を学ぶ必要があるかどうかという問題である。この問題を巡って洋務思想家と封建思想家の間に激しい論争が起こ

った。封建思想家は西洋を学ぶことを頑固に反対し、封建の「綱倫名教」、「論紀聖道」をできる限り守ることを主張した。この時期の「中体西用」思想は洋務思想家と頑固な保守派との根本的な対立を反映すると同時に、洋務派と保守派がこの問題についてまだ完全に決裂していないことを意味している。

1884年の中仏戦争後、特に1894年の日清戦争後、「中体西用」思想は第二の段階に入る。この時期において、西学者はすでに「士林のくず」、「名教の罪人」とされてはいなかった。西洋を学ぶ必要があるかどうかという問題もすでに思想家たちの論争の核心ではなくなった。この時期に、資産階級の維新運動が勃発し、思想分野においては洋務派と改良派と対立が起こっていた。洋務思想家が臨む主な論敵はもう保守派ではなく、変法維新を主張する改良思想家であった。このような状況で、「中体西用」思想はもう積極的な意義を失い、封建の「聖道」を守って、資産階級の変法維新運動に反対する武器になってきた。そのため、維新派思想家に批判されるようになった。

嚴復は、中、西両学の関係を「体」、「用」の関係とすることに明確に反対する。『外交報』第9期において、嚴復は「与外交報主人論教育書」の中で、次のような例を挙げ、「牛の体がある以上、重荷を背負う用がある。馬の体がある以上、遠くまで走る用がある。牛を体とし、馬を用とすることは聞いたこともない。中、西の差異は人種の顔のようで、無理に似ていると言っはいけない。そのため、中学には中学の体用があり、西学には西学の体用がある。分けたら両立でき、合わせたら両亡になる」¹³⁾と述べている。

何啓、胡礼垣は張之洞の「中学は内学であり、心身を修める。西学は外学であり、世間に応じる」という論点に対して異議を明確に提出した。彼らは「為学」の元は「立政」であると考えている。「但し、専ら為学に力を集中し、立政に力を入れないことは、本末、体用、先後、緩急を了解しなかったのである。富強の政を立てなくて、富強の学があっても、なにも役に立たない。」と彼らは指摘している¹⁴⁾。

このように、中学と西学について、各時期の代表者たちの考え方が異なっているのである。これも近代化の初頭、中国の思想家らがこの問題を探求することにおける多様性と複雑性を反映しているといえよう。

4 「和魂洋才」思想の形成及びその発展軌跡

4.1 「和魂洋才」思想の形成

「和魂洋才」の元の言い方は「和魂漢才」である。「和魂漢才」という言葉は日本平安時代に流行していた。その意味は日本固有の精神を以て、中国から伝来した学問を活用することである。幕末西学東漸後、中国の封建文明は西洋と比べると劣って見えた。そして、「和魂漢才」は改造され、「和魂洋才」に代わった。しかし、当時の日本の民族精神にはすでに元々先進的な中国文明を取り入れていた。だから、その時の「和魂洋才」の「和魂」は平安時代の「和魂」と、概念において異なる。すなわち、その時の「和魂」は漢文化を取り入れた「和

魂」を指しており、「和魂漢才」全体が「和魂」に相当すると言えよう。

「和魂洋才」の直接的な表現は「東洋道徳、西洋芸術」である。その提唱者は幕末の著名な思想家、佐久間象山である。彼のそれに関する思想は以下のいくつかの点に要約できよう。

1. 西洋自然科学の優秀性を評価し、それを心得る必要性を強調していること。彼は「今の世は和漢の学識のみにては何分不行届、是非とも五大洲を総括致し候大経済に無之候ては難叶候。全世界の形勢コロンビユスが究理の力を以て新世界を見出し、コペルニキユスが地動の説を發明し、ネウトンが重力引力の実理を究知し、三大發明以来万般の學術其根柢を得、聊かも虚誕の筋なく悉皆着実に相成、是に由て欧羅巴・弥利堅諸州次第に面目を改め、蒸汽船・マグネチセ・テレガラフ等創製し候に至り候て、実に造化の工を奪ひ候儀にて、可愕可怖模様に相成申候」と述べている¹⁵⁾。
2. 西洋諸国と比べて、自国の劣った点を分析し、当時の日本の不足を要約したこと。彼は当時の日本の劣悪な条件の原因として四つの理由をあげている。すなわち、「其一は遊民多くして、徒らに其財用を耗靡し候に御座候、其二是貿易・理財の道外蕃の如く開けざるに御座候、其三是物産の学未だ精しからず、山沢に遺材あるに御座候、其四是百工の職、力学・器学を知らず、人力限りあるに御座候。」¹⁶⁾であるという。
3. 「彼を知り己を知らば百戦危うからず」、「夷の術をもって夷を防ぐ」を主張していること。数多くの幕末の思想家は「孫子兵法」に基づいて「彼を知り己を知らば」の必要性を強調している。象山もそうであり、「当今外寇の急務は彼を知るより先なるはなく、彼を知るの方法は、彼の技術を尽すより要なるはなし」¹⁷⁾と述べている。この認識によって、彼はさらに「夷の術をもって夷を防ぐ」を主張し、「愚意には、夷の術を以て夷を防ぐより外無之と存候。彼に大艦あらば、我も亦た大艦を作るべし。彼に巨砲あらば、我も亦巨砲を造るべし」¹⁸⁾と述べている。ここで強調する重点は相変わらず軍事方面であり、近代日本が西洋から学ぶ最初の状況を反映した。
4. 「東洋道徳、西洋芸術」を明確に提起したこと。象山は漢詩を作った。その中に「東洋道徳西洋芸」¹⁹⁾という句がある。それは彼の「和魂洋才」思想に対する最も簡略的な表現である。それ以外に、彼はまた「和魂洋才」思想に対してこう解釈している。「漢土聖賢の道徳仁義の教を以て是が経とし、西洋芸術諸科の学を以て是が緯とし」²⁰⁾。この説明からみれば彼が言った「東洋道徳」は漢土中国の伝統的な儒家倫理道徳を指していることがわかる。「儒者の学、世を経め民を済うを以て務となす。学以て世を経め民を済うに足らざれば、儒に非ざるなり」²¹⁾。そのため、彼が言った「東洋道徳」は実際には中国儒家の倫理道徳を指すのみならず、日本の特色がある、すなわち「日本化」した儒家の倫理道徳をも指している。それと同時に、「日本化」した儒家の倫理道徳だけでなく、当時の国家を治める実用的な必要性に合う、すなわち時代要求に合う儒家の倫理道徳をも指している。

4.2 「和魂洋才」思想の発展

「和魂洋才」思想は幕末に形成されたとはいえ、日本の近代化の全過程を貫いた。佐久間象山のそれに対する典型的な論述以外に、ほかの思想家もこの問題について論述したことがある。

まず、日本開国前後は「和魂洋才」思想が形成された時期と思われる。この時期の特徴は「和魂」と「洋才」が同時に提唱され、どちらを優位に置くかは言及されていない。この時期には、象山以外に、橋本左内と横井小楠もこの問題を明確に論じた。左内は「器械芸術取於彼、仁義忠孝存於我」²²⁾と明確に述べている。小楠も「堯舜孔子の道を明かにし、西洋器械の術を尽す。何ぞ富国に止まらん。何ぞ強兵に止まらん。大義を四海に布かんのみ」²³⁾と述べている。

次に、明治初期の10年間ぐらいは、思想家たちが「洋才」を強調する時期であった。日本文学者森鷗外はこの時期を「欧化主義」の時期と呼ぶ²⁴⁾。この時期に明治政府は、旧弊を取り除き、文明開化政策を大いに進めた。明治政府が頒布した五箇条の御誓文に「旧来の陋習を破り」、「知識を世界に求め」²⁵⁾という内容がある。そして、あっという間に西洋の風は日本列島に吹きわたって、いわゆる「脱亜入欧」運動が起こった。この時期の思想家は大部分が西欧近代の文明を積極的に宣伝し、文明開化の必要性をも論証したのである。福沢諭吉の『文明論之概略』や、加藤祐一の『文明開化』や、小川為治の『開化問答』などが挙げられる。

凡そ明治10年以後、「和魂」を軽視するようになり、一方的に「洋才」を強調する時期に入った。森鷗外はこの時期を「反欧化主義時期」²⁶⁾と呼ぶ。この時期に、欧化運動が明治社会にもたらす問題を各角度から批判する思想家は少なくない。例えば、比較的過激な幸徳秋水は明治13年に「社会腐敗の原因と其救治」を発表した。彼は、道徳から見ると明治政府がすでに「腐敗墮落」²⁷⁾していると激論した。もう一人の思想家、徳富蘇峰の言葉はさらに激しかった。蘇峰は明治20年に『新日本之青年』を著した。「明治ノ世界ハ批評ノ世界ナリ。懐疑ノ世界ナリ。無信仰ノ世界ナリ」と説きおこす。蘇峰はかつての封建社会の道徳は「不完全」であるが、「然レトモ社会の秩序井然トシテ、不完全ナカラモ衣裳ヲ着シタリ」と述べている。今日においては、「舊衣ヲ脱シ盡シテ、未タ新衣ヲ着セス」と言ってよい状態にあるのである。このように、結論としては、明治の社会が、「その道徳的側面においては、裸体の社会」²⁸⁾といった様相を呈していると表している。このような当時の社会問題を指摘する思想家は秋水と蘇峰に限らない。日本思想史の研究者、坂本多加雄は「その立場を異にする他の多くの明治の思想家たちにも共通するものであった」²⁹⁾と述べている。

以上は、「和魂洋才」に関する各時期の思想家たちの主な傾向或いは基本的な見解である。実は、各時期に多かれ少なかれ違う考え方もあり、すなわちほかの傾向も存在していた。例えば、「和魂洋才」思想が形成される時期に、西洋文明を完全に否定する考えと西洋と交易するのを断然排斥する主張もあった。当時、保守派の大橋訥庵はこのように考えている。彼

は相変わらず西洋を「戎狄」と考えており、「元来戎狄は士と商との無差別、官位有之候者も諸国渡海交易致候事にて、夫は戎狄ゆゑ義・恥之二を少も存不申、只利潤之事而已専」³⁰⁾、「速に天朝よりして外夷攘斥の勅命を公然と海内に下し給ふて感奮激発せしむるに如くなし」³¹⁾と激論した。欧化傾向が激しい明治初期にも違う見解を持っている代表者もいた。佐田介石は当時、文明開化を口実として欧化するという現象に対して非常に批判的であり、「文明開化と申事、西洋に限れる事に非ず。西洋には西洋に固有する文明開化あり、日本には日本に固有する文明開化あり」³²⁾と指摘した。全般にわたって欧化することに明確に反対している。

5 「中体西用」と「和魂洋才」の比較

「中体西用」と「和魂洋才」思想は、その誕生した背景から言っても、その内容や本質から言っても、類似するところもあるし、明らかに異なるところもある。次に「中体西用」と「和魂洋才」思想の比較を試みたい。

5.1 誕生した背景の比較

まず、発生する時間の比較をしてみる。時間から見れば、両者とも19世紀半ば前後に生み出された。具体的に言えば、「中体西用」は二回のアヘン戦争後、洋務運動が勃発したばかりの19世紀60、70年代に生み出された。「和魂洋才」は幕末の開国前後に生み出されたのである。日本においては開国前後の際にすでにこの方面における思想が提唱された。すなわちこの方面における思想の提唱は開国と大体同時であった。それに対して、中国においては開国を強いられた20年余りの後、この方面における思想が提唱されたのである。すなわち、中国においてのこの方面における思想の出現は相対的にも遅れていたのだ。

次は、誕生した背景の比較を試みたい。両者の誕生した背景は類似する。西洋列強は相次いで両国の開国を強要したが、両国とも外来の侵略に抵抗する歴史使命を負っていた。また、国内矛盾は激しくなるにつれ、両国の資本主義工商業は生み出され発展し始め、両国とも近代化へと出航する段階にあった。西洋の科学技術、経済知識、学術思想などが両国に伝わってきて、両国の固有文明に強く衝撃を与えた。

しかし、国情の不同によって、両国に大きな相違も存在する。特に歴史の「重荷」について、両国の相違がさらに大きい。

郭沫若は中日近代化の失敗及び成功の角度から、両国に存在した相違を分析した。両国伝統文化の「重荷」の軽重が重要な原因だと指摘した。中国は資本主義以前の文化が相当に壮麗であったので、「固有文化の負担が重すぎ」とし、これは中国が「西洋文化を取り入れることにあまり成功しなかった重要な原因の一つである」と述べている。また、それに対して、「日本の負担は中国ほどではなかった」ということで、「日本は西洋文化を取り入れることに成功したのである」³³⁾とも述べている。

梁啓超も中国と日本が外来文明を取り入れることにおける相違を分析したことがある。「中

国が外来の学を取り入れることは日本と違う。日本は小国で、それに固有の学を持っていないから、外部から入るものがあると、日本人がわんさと押しかける。また、あっという間に全国にわたって変化が起こる。それに対して中国は違う。中国は大国であり、数千年前から伝わってきた固有の学を持っており、保守勢力も強い。そのため、外部の思想が入りにくい。入れたとしても、数十年、百年が経っても、寸分も動揺しない。墨を水に入れることと同様に、もしその水が小さい盥や池であるなら墨がすぐ隅々まで広まるが、滔々たる河や海であるなら簡単に染められないだろう。」³⁴⁾

郭沫若と梁啓超は期せずして同じような見解を論じた。つまり、二人とも両国に歴史の「重荷」においてずいぶん差違があると指摘した。この見方は有識であるように思われる。両国の歴史の「重荷」の差違ゆえに、両国が欧米諸国を認識する過程には異なる特色があったのである。

5.2 具体的な内容の比較

「中体西用」及び「和魂洋才」は自国の固有伝統を守るだけでなく、西洋から学ぶことも強調する。同時に、両者とも自国の伝統を守ることを優先とし、或いは最も重要な位置に置くことを主張する。この点においては、両者は基本的に同様である。しかしながら、両者には内容における差違があると考えられる。

先ず、洋務思想家が言った「中体」は、前述の通り、中国伝統的な封建政治経済制度及びそれなりのイデオロギーを指しており、すなわち中国の封建の体である。幕末の思想家がいう「和魂」は、前に述べたように国家を治める実用性に合って「日本化」した儒家倫理道徳を指している。その内容は主に精神の面に具現し、つまり日本民族の魂である。両者は一つが「体」といい、一つが「魂」という。一つが封建性を守り、もう一つが民族性を強調する。その差違がとても明確である。

次は、洋務思想家がいう「西用」と幕末思想家がいう「洋才」は、西洋資本主義国家の先進科学技術を指しているが、強調するところが異なる。つまり、前者が強調するのは中国封建統治を固めることに対する西洋科学技術の作用であり、後者が強調するのは西洋科学技術の技術と才能を心得ることである。すなわち、一つは「用」を重点とし、もう一つは「才」を強調する。両者の差違も明らかである。

また、より重要なのは、両者の「中と西」或いは「和と洋」の関係に対する認識である。「中体西用」は中学と西学を明確に「体」と「用」に分けている。すなわち、重要さと本末の区別がある。「和魂洋才」は両者を「魂」及び「才」に分けているだけで、一方を重視し他方を軽視する意思があまりない。

5.3 本質の比較

「中体西用」と「和魂洋才」は一つの時代の社会思潮として、本質的に大きく異なってい

ると思われる。

先ず、両者の提唱者が異なる。「中体西用」思想の提唱者は主に洋務官僚及びその代理者である。これらの人は政権を握る王侯貴族や、地方を占める地方長官や、洋務官僚のために洋務事業を取り扱うその他の洋務人員などである。無論、洋務思想を持つ知識人も含まれているが、主要な提唱者はやはり洋務官僚及びその代理人である。これらの人々は清王朝と複雑で入りくんだ関係があり、大部分が封建統治を固めることを自分の責任とする。「和魂洋才」思想の提唱者は主に改革を主張する進歩的な思想家と維新運動の啓蒙思想家である。例えば、佐久間象山、横井小楠は幕末の有名な思想家であり、福沢諭吉は明治初期の著名な啓蒙思想家である。これらの人々は日本固有の封建制度に対して断固として反対し、思想界において明治維新運動に大きく貢献した人物である。

次に、両者の目的も異なる。「中体西用」の提唱者は中国固有の綱倫名教と基本的な政治経済制度を変えようとし、ない考えを最初から極力表明した。また、変法維新運動が勃興した後、彼らは改良派の改革主張を全力で反対した。彼らの根本的な目的は封建的制度を守ることにある。「和魂洋才」の提唱者は最初から最後まで封建の弊害を取り除くことと、文明開化政策を進めることを根本的な目的としていた。彼らは国家を治める実用的な学を重要とし、実際には、新しい制度を作ることと体制の転換を強調していた。

そのため、本質から言ったら、両者の差違がとても明確である。一方は保守的で消極的な要因が多く、もう一方は進歩的で、積極的な要素が多いようである。

おわりに

上述の考察で分かるように、「中体西用」と「和魂洋才」の両国の近代化における役割は大きい。

中国は西洋列強の相次ぐ侵略に惨敗し、やむをえず西洋の科学文化を正視せざるをえなかったが、伝統的な政治体制と文化に対してはその保持を終始望んでいた。一方日本は中国ほど伝統的なものには縛られず、西洋に対する態度は中国よりかなり柔軟かつ積極的で、あまり憚らずに西洋の文化を主体的に取入れていた。

こうした対応の差異が生じたのは、両国の文化背景、政治体制、社会環境、国際環境、国民性などの差異にあることは言うまでもない。しかし、日中両国の近代化の歩みの差異を作り出したのは、なんと言っても中国人の伝統的思考様式と政治体制による束縛が最大の要因であろう。

西洋文明の受容において、中国は中華文明を自負し、西洋文明をライバルとして受け止め、政治体制の維持のため、西洋文明の軍事技術を限定して受容しようとした。これに対し、日本は西洋文明をモデルとして受け止め、富国強兵のため、価値のあるものなら、何でも積極的に取り込んでいた。

それは中国の伝統文明には体系があるため地盤が固く、そう簡単に崩すことができないの

に対し、日本はそもそも体系自体が希薄であるが故に柔軟性があり、また、過去数世紀にわたり大陸文化を受け入れていた歴史があり、他文化を受け入れる寛容な精神が培われていたからである。

また、「和魂洋才」の「魂」は精神的なもので形がないので、あまり束縛にならないのだが、「中体西用」論では儒教的な教えが「体」として確固としてあって、その上にその「体」を守るために西洋の科学技術を「用」として導入しようとしたため、当時の皇帝独裁の政治体制の維持、補強のための欧化に過ぎないという限界が生じる。

そういう意味では、出発の時点から「中体西用」はこうした中途半端な保守的性格を有するが故に、近代化の理念として中国を良い方向に導くことができなかった。「和魂洋才」は精神は残すが、それ以外は形式、制度も含めて制約なく西洋化を目指したため、近代化に資することは大であったと言えよう。両思想に示されているように、西洋文明の受容における両国の態度と方針が最初から異なっていることが明らかである。ある意味では、「中体西用」は攘夷論、「和魂洋才」は開国論と言っても過言ではなかろう。文化の受容には様々な要因が働いているのは言うまでもないが、これらが両国の近代化の歩みの差異を作り出した最大の要因と言えよう。

総じて言えば、「富国強兵」という共通理念はあっても、それぞれの国の状況、民族文化の背景が異なるため、西洋文明の受容において、日本は抵抗はなかったが、中国はどうしても儒教的な価値観から脱却できなかつたのである。「中体西用」論の盛衰は、1つの例証として中国のような古い文明を持つ国が外来の文化を取り入れる際、歩んできた独特な道程を反映していると言えよう。

注

- 1) 中国史学会編集（1961）「光緒六年十二月初一日直隸總督李鴻章上奏文の附片」、『洋務運動』（六）、上海人民出版社、p.149
- 2) 李鴻章（1906）「復劉仲良中丞」、『李文忠公全集』（朋僚函稿第1巻）、p.30
- 3) 李書源（2008）『籌辦夷務始末』（第25巻）、中華書局、p.10
- 4) 中国史学会編集（1961）「同治五年五月十三日左宗棠の上奏文」、『洋務運動』（五）、上海人民出版社、p.8
- 5) 李書源（2008）『籌辦夷務始末』（第48巻）、中華書局、p.1
- 6) 李鴻章（1906）「洋式鉄工所・機械の設置についての上奏文」、『李文忠公全集』（上奏文稿第9巻）、p.35
- 7) 鄭觀應（1961）『洋務運動』（六）、上海人民出版社、p.49
- 8) 薛福成（1961）「籌洋芻議・变法」、『戊戌变法』（一）、上海人民出版社、p.160
- 9) 王韜（1959）「上當路論時務書」、『弢園文録外篇』、中華書局、p.297
- 10) 湯志鈞（1981）『康有為の政論集』（上冊）、中華書局、pp.294-295
- 11) 孫家鼐（1961）「京師大学堂の再設置を議論する上奏文」、『戊戌变法』（二）、上海人民出版社、p.426
- 12) 張之洞（2010）『勸学篇』、吉林出版集团有限责任公司
- 13) 嚴復（2009）『外交報匯編』、国家図書館出版社、p.230
- 14) 何啓、胡礼垣（1902）『勸学篇書後』、広訳書局鉛印、pp.35-40
- 15) 本莊栄治郎（1966）『日本経済思想史研究』（上巻）、日本評論社、p.232

- 16) 藤井定義 (1963) 『幕末の経済思想』 (大阪府立大学経済研究叢書第 10 冊)、大阪府立大学経済学部、pp.97-98
- 17) 植手通有 (1974) 『日本近代思想の形成』、岩波書店、p.37
- 18) 同上、p.37
- 19) 永田広志 (1978) 『日本哲学思想史』、商務印書館、p.262
- 20) 植手通有 (1974) 『日本近代思想の形成』、岩波書店、p.55
- 21) 同上、p.36
- 22) 塚谷晃弘 (1980) 『近代日本経済思想史研究』、雄山閣、p.11
- 23) 植手通有 (1974) 『日本近代思想の形成』、岩波書店、p.92
- 24) 平川祐弘 (1987) 『和魂洋才の系譜』、河出書房新社、p.24
- 25) 本荘栄治郎 (1966) 『日本経済思想史研究』 (上巻)、日本評論社、p.233
- 26) 平川祐弘 (1987) 『和魂洋才の系譜』、河出書房新社、p.24
- 27) 大河内一男 (1970) 『幸徳秋水全集』 (第 2 巻)、明治文献、p.150
- 28) 植手通有 (1974) 『徳富蘇峰集』 (明治文学全集第 34 巻)、筑摩書房、pp.117-121
- 29) 坂本多加雄 (1991) 『市場、道徳、秩序』、創文社、p.145
- 30) 藤井定義 (1963) 『幕末の経済思想』 (大阪府立大学経済研究叢書第 10 冊)、大阪府立大学経済学部、p.71
- 31) 同上、p.79
- 32) 本荘栄治郎 (1966) 『日本経済思想史研究』 (下巻)、日本評論社、p.275
- 33) 郭沫若 (1959) 「中日文化の交流」、『沫若文集』 (第 11 巻)、人民文学出版社、pp.70-72
- 34) 梁啓超 (1916) 「中国学術思想の変わりの方向を論じる」、『飲冰室文集』 (第 20 冊)、中華書局、pp.6-7

参考文献

(中国語)

- [1] 薛福成 (1961) 「籌洋芻議・变法」、『戊戌变法』 (一)、上海人民出版社
- [2] 郭沫若 (1959) 「中日文化の交流」、『沫若文集』 (第 11 巻)、人民文学出版社
- [3] 何啓、胡礼垣 (1902) 『勸学篇書後』、広訳書局鉛印
- [4] 李鴻章 (1906) 「復劉仲良中丞」、『李文忠公全集』 (朋僚函稿第 16 巻)
- [5] 李鴻章 (1906) 「洋式鉄工所・機械の設置についての上奏文」、『李文忠公全集』 (上奏文稿第 9 巻)
- [6] 李书源 (2008) 『籌辦夷務始末』 (第 25 巻)、中華書局
- [7] 李书源 (2008) 『籌辦夷務始末』 (第 48 巻)、中華書局
- [8] 梁啓超 (1916) 「中国学術思想の変わりの方向を論じる」、『飲冰室文集』 (第 20 冊)、中華書局
- [9] 孫家鼐「京師大学堂の再設置を議論する上奏文」、『戊戌变法』 (二)、上海人民出版社
- [10] 湯志鈞 (1981) 『康有為の政論集』 (上冊)、中華書局
- [11] 王韜 (1959) 「上当路論時務書」、『弢園文録外篇』、中華書局
- [12] 武安隆 (1995) 「从“和魂洋才”到“和魂洋才”—兼说“和魂洋才”和“中体西用”的异同」、『日本研究』 (第 1 期)、遼寧大学日本研究所、pp.61-66
- [13] 嚴復 (2009) 『外交報汇编』、国家図書館出版社
- [14] 余芳梅 (2008) 「“中体西用”と“和魂洋才”思想の比較」、『華南理工大学学报』 (第 10 巻第 4 期)、華南理工大学、pp.35-37
- [15] 张之洞 (2010) 『勸学篇』、吉林出版集团有限责任公司
- [16] 鄭觀応 (1961) 『洋務運動』 (六)、上海人民出版社

(日本語)

- [17] 伊原沢周 (1999) 『日本と中国における西洋文化の撰取論』、汲古書院
- [18] 植手通有 (1974) 『日本近代思想の形成』、岩波書店
- [19] 植手通有 (1974) 『徳富蘇峰集』 (明治文学全集第 34 巻)、筑摩書房
- [20] 大河内一男 (1970) 『幸徳秋水全集』 (第 2 巻)、明治文献
- [21] 坂本多加雄 (1991) 『市場、道徳、秩序』、創文社
- [22] 塚谷晃弘 (1980) 『近代日本経済思想史研究』、雄山閣

- [23] 中島嶺雄 (2008) 『日本人と中国人ここが大違い：「目からウロコ」の比較文化論』、PHP 研究所
- [24] 永田広志 (1978) 『日本哲学思想史』、商務印書館
- [25] 平川祐弘 (1987) 『和魂洋才の系譜』、河出書房新社
- [26] 藤井定義 (1963) 『幕末の経済思想』 (大阪府立大学経済研究叢書第 10 冊)、大阪府立大学経済学部
- [27] 本荘栄治郎 (1966) 『日本経済思想史研究』 (上巻)、日本評論社
- [28] 本荘栄治郎 (1966) 『日本経済思想史研究』 (下巻)、日本評論社

(平成 28 年 5 月 9 日受付、平成 28 年 7 月 7 日再受付)